

1-2 福岡市の歴史文化の特徴

本市は、弥生時代の稲作伝来以降、奴国・伊都国、古墳時代の豪族たち、古代の鴻臚館、中世の国際貿易都市・博多、江戸時代の福岡藩、明治時代以降の福岡市と、各時代の社会的・歴史的状况を背景として、性格が異なる都市が重層的に形成されてきました。交流・定住に適した人々をひきつける地勢を基盤に、大陸や朝鮮半島に対する日本の玄関口として、また、大陸・半島と日本各地をつなぐ結節点として、2000年以上多様な文化と交わりながら進化してきた都市発展のストーリーを有しています。そして、このような歴史の重層性を背景に、現代においても独自の文化が息づく九州最大の活力ある都市として発展を続けています。

本方針では、福岡固有の歴史文化の特徴を以下のように捉えます。

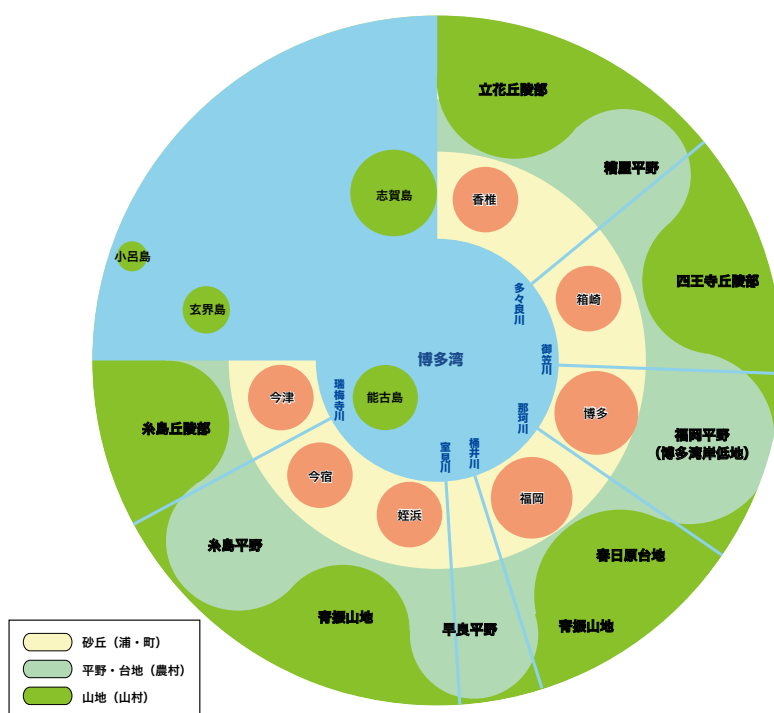
**海を通じた交流を軸にアジアの交流拠点都市として発展を遂げた
2000年を超える歴史文化の重層性**

(1) 歴史文化を育んだ人々をひきつける地勢

本市は、穏やかな内湾地形の博多湾を中心として、湾に注ぐ河口部には漁業や海運業を営む浦々が形成され、その奥の稲作に適した肥沃な平野部では早くから農村集落が形成されてきました。背後には湾・浦・平野を抱く深い山々がそびえ、農・林業、山岳寺院の造営などが都市文化を支えてきました。

このような地勢は古来、この地にやってくる人々をひきつけ、都市が発展する要因となりました。

また、本市では、玄界灘を介して大陸や朝鮮半島に近接する地の利を活かし、交渉・交流の玄関口として、また、大陸・半島と日本各地をつなぐ結節点として都市が発展してきました。



福岡市の地勢

（２）歴史文化が育んだ「いま」—九州最大の活力ある都市としての持続的発展

本市は、150 万人以上の人口を擁する九州一の商業・流通都市として成長してきました。スタートアップ都市、国際都市、流通都市として、更なる成長を見せています。

●成長都市・福岡

本市の人口は、政令指定都市中第 5 位^[1]、人口増加数と増加率は政令指定都市中 1 位^[2]と、人口減少時代にありながら、人口増加をみせている稀有な都市です。

また、成長可能性都市ランキングでは、総合ランキングが東京都に次いで全国 2 位^[3]となっています。

●スタートアップ都市・福岡

本市は、開業率が全国トップクラス^[4]であり、「グローバル創業・雇用創出特区」として創業の支援と雇用の創出に取り組んでいます。

●国際都市・福岡

本市は、外国航路乗降人員数^[5]、クルーズ客船寄港回数^[6]、在留外国人の伸び率^[7]が政令指定都市中第 1 位であり、国内屈指の国際都市となっています。

●流通都市・福岡

本市は、政令指定都市で最も大陸に近いという地理条件や、国際空港から都心までのアクセス時間がアジア 13 都市中第 1 位^[8]という交通の利便性、世界の主要港とダイレクトにつなぐコンテナ航路ネットワーク等を有し、流通拠点都市として発展を続けています。

（３）「いま」に伝わる 2000 年を超える都市集積を示す文化財

本市は、交流・暮らしに適した地勢を基盤に、2000 年以上前の弥生時代からヒト、モノ、情報が集まる都市が形成され、国際交流拠点であった博多湾を中心ににぎわい、海や陸を通じた各地とのつながりのなかで発展し、外に対するまもりを固めながら、都市と周縁地域との支え合いの中で豊かな歴史文化を形成し、現在の福岡市へと発展を続けてきました。そのような本市の成り立ちや独特な生活文化など、福岡ならではの歴史文化を物語る文化財が、市内各地に豊富に残されています。

【脚注】

-
- [1]「平成 27 年国勢調査」総務省統計局
 - [2]「平成 27 年国勢調査」総務省統計局_2010 年～2015 年
 - [3]「成長可能性都市ランキング」株式会社野村総合研究所_2017 年
 - [4]「福岡市経済の概況」福岡市経済観光文化局_2019 年
 - [5]「港湾統計（年報）」国土交通省総合政策局_1993 年～2017 年
 - [6]「平成 30 年 1 月 16 日付 プレスリリース」国土交通省港湾局_2015 年～2017 年
 - [7]「在留外国人統計」法務省_2012 年～2017 年
 - [8]「世界の都市総合力ランキング Global Power City Index YEARBOOK 2017」森記念財団 都市戦略研究所_2017 年

1-3 福岡ならではの歴史文化を物語るストーリー

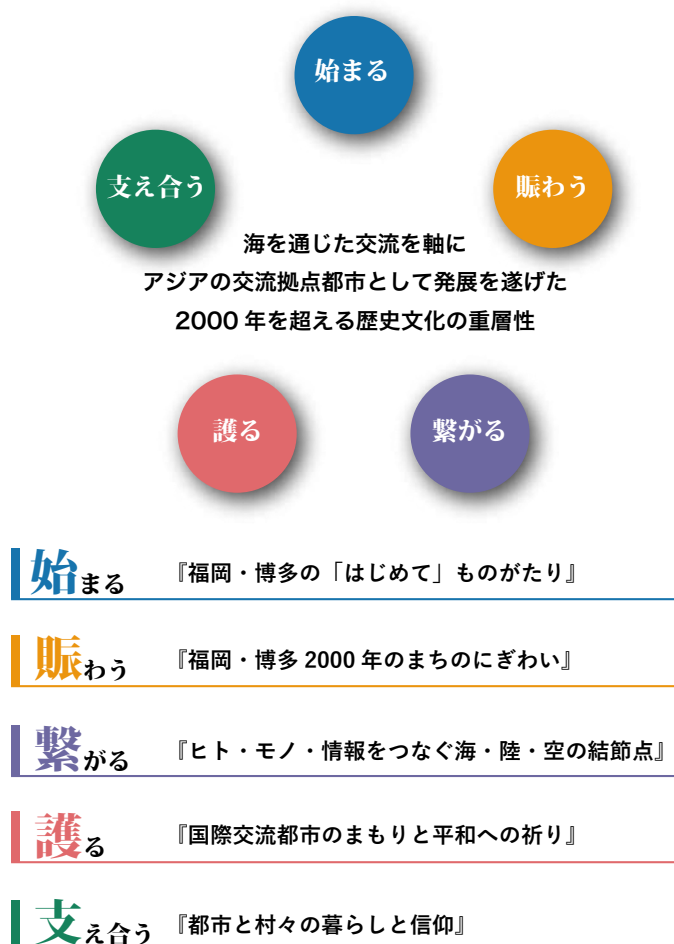
これまでの文化財行政は、個別の文化財に対する保存活用を中心に行われてきました。しかし、本来文化財とは、地域の歴史の流れのなかで相互に関連し合い、一定の広がりを持ちながら成立するものです。そのため、まず地域の歴史文化の特徴を明らかにし、文化財がどのようなストーリーのなかで成立したものを把握することによって、個々の文化財を線で結びつけ、さらに周辺の環境も含めて面として保存活用していく必要があります。

ここでは、福岡ならではの歴史文化をより広く多くの人々に知ってもらうため、その特徴を市内各地の歴史や文化を交え、分かりやすくまとめた物語を「メインストーリー」として設定します。さらに、「メインストーリー」を体感する面的な広がりをも「歴史文化エリア」として設定します。

(1) 歴史文化を物語るメインストーリー

本市が歩んだ2000年を超える歴史を俯瞰し、「始まる」、「賑わう」、「繋がる」、「護る」、「支え合う」の5つの視点を設定しました。

これら5つの視点から、「メインストーリー」、そして「メインストーリー」と関連する文化財を紹介します。



始まる

福岡・博多の「はじめて」ものがたり

本市は博多湾という天然の良港にめぐまれていたこともあり、古くから海を介して大陸や半島と交流してきました。その結果、最先端の文化が続々とこの地にやってきました。日本の食文化の基盤である米作り、中世の禅宗やそれに伴う喫茶、粉食の文化など、福岡・博多には各時代の、そして多くの「日本初」があります。これらは、本市の文化を形成する原点となりました。

弥生時代の「はじめて」－米作り

立地環境を活かした本格的な対外交流は、弥生時代の水稻耕作と、これに伴う諸文化の伝播にはじまります。日本列島で最も古い時期の水稻耕作が確認された板付遺跡は、米を主食とする日本文化の原点ともいえる農村跡です。稲作が普及して生産力が上がり、食糧の備蓄が生じると、集落形態や集団関係、さらにはそれらを包括する社会そのものに変化を与えました。その結果、^{なか}那珂遺跡や板付遺跡には環濠で囲われた集落が、また^{よしただけ}吉武遺跡群には青銅製の武器・鏡や装身具など豪華な副葬品とともに葬られる有力者の墓である「特定集団墓」が他の地域に先がけて出現しました。

特定集団の成長やこれを中心とする地域社会の広域的なまとまりは、中国の歴史書に「国」として記述されます。「奴国」の一部であり日本史上最古級の都市ともいわれる比恵・那珂遺跡群は、当時の最先端テクノロジーであった青銅器の生産などを行い、国内外との活発な交流を通して繁栄しました。



板付遺跡で見つかった灌漑施設



吉武高木遺跡出土の副葬品

鴻臚館の「はじめて」－唐物

古代になると、博多湾に面して設けられた鴻臚館（筑紫館）が日本の玄関口となります。鴻臚館は、外国使節の^{きょうおう}饗応や使節の滞在のための施設であり、最先端の海外文化が日本でいち早く持ちこまれ、都に海外の文化や文物（「唐物」）を伝える窓口でもありました。イスラムに起源をもつガラスや陶器などが出土することは、幅広い対外交流を窺わせます。このような対外交流の形は、鴻臚館衰退後に貿易都市として発展する博多に受け継がれていきます。



鴻臚館跡出土の中国陶磁器



鴻臚館跡出土のイスラム陶器

中世博多の「はじめて」－国際都市

鴻臚館の衰退以降、貿易都市として発展した中世博多は商人たちが行き交い、中国風の屋根瓦で飾られた建物が建ち並び、独特の景観を作り出していたことが想像されます。日本最初の禅道場といわれる聖福寺が僧・栄西しょうふくじにより開かれ、禅宗に伴って様々な文化が伝えられました。喫茶の風習や、うどん・そば・饅頭といった粉食文化も、その後の日本の食文化に大きな影響を与えています。

恒常的な対外交流がもたらした国際色豊かな中世博多は、日本初の「国際都市（チャイナタウン）」といえるでしょう。



博多遺跡群出土の中国系瓦



承天寺の「御饅頭所」の碑

【関連する文化財】

もの	大陸系磨製石器 青銅器 金印 中国陶磁器 イスラム陶器・ガラス 承天寺境内の石碑群 だいおうこくしぞう 大応国師像 せいがんじうらぼんえんぎ 誓願寺盂蘭盆縁起 中国系瓦
ばしょ	板付遺跡 比恵・那珂遺跡群 吉武遺跡群 鴻臚館跡 博多遺跡群 聖福寺 承天寺
いとなみ	水稻耕作 金属器生産 喫茶 粉食

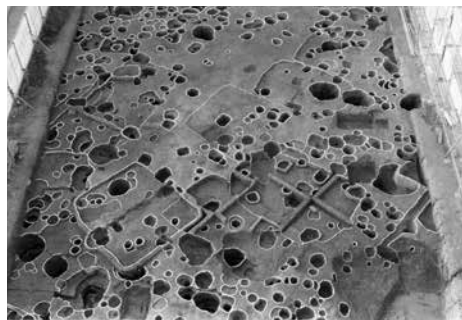
賑わう

福岡・博多 2000 年のまちのにぎわい

博多湾を臨む本市には、多様な目的や背景をもった人々が集まり、古くから活発な経済活動が行われてきました。およそ 2000 年前の「奴国」以降、中世の国際貿易都市「博多」、江戸時代の城下町「福岡」、そして、現在、150 万人以上の人口を擁する「福岡市」に至るまで、活気ある都市として成長を続けています。そのなかで、信仰、工芸、行事や祭り、食文化など、本市特有の都市文化が育まれました。

「奴国」のにぎわいー日本最初の都市

建武中元 2(57)年に後漢の皇帝から金印を授けられた「奴国」。当時、奴国の一部であった比恵・那珂遺跡群には道路や運河、区画溝等が計画的に配置され、多数の住居跡や井戸が密集して営まれたことから、にぎわう港町の風景が想像されます。大陸から伝えられた高度な技術により青銅器やガラス製品の生産も行われるなど、すぐれた外交力を背景に発展していった奴国のにぎわいが垣間見えます。



比恵遺跡群の密集する建物跡



比恵遺跡群出土のガラス加工具

「博多」のにぎわいー国際貿易都市へ

交易の拠点が鴻臚館から博多に移ると、「博多綱首」と呼ばれる宋商人などが住むようになり、「博多津唐房」^{はかたつとうぼう}がつくられました。国際貿易都市に成長した博多は、アジアの人々や文物が行き交う、異国情緒あふれる憧れの都市でもありました。商人たちの経済活動の活発化にともない、商業関係者や留学僧、文化人や職人などの多様な人々が集まり、禅宗文化、博多織、酒造業、博多祇園山笠、博多松ばやしなど、現在まで伝えられる文化が生み出されていきました。

また、江戸時代中期以降の博多では、博多織をはじめとする織物業、「博多^{いもじ}鋳物師」の名の残る鋳物業、食品産業といった多様な産業が盛んになり、宗七焼^{そうしちやき}や素焼の博多人形などの工芸品が製作されるなど、商工業都市としてもにぎわいました。



博多練酒の図（『筑前名所図会』）



博多鋏



博多人形

「福岡」のにぎわいー城下町からモダン都市へ

江戸時代、福崎（現在の舞鶴公園）の地に新たに福岡城が築城されます。この地が選ばれた理由は、博多湾岸にあり、かつ国際貿易都市「博多」に接し、海上交通に便利な立地であるとともに、城下を広げる余地があったためといわれます。武士や商人・職人が移り住んだ新たな城下町「福岡」は、商人の町「博多」と並立する双子都市となり、福岡藩の政治経済の中心として栄えます。福岡・博多では庶民の娯楽でもあった祭りや行事がにぎやかにとりおこなわれたほか、歌舞伎や相撲、芝居でにぎわうなど都市文化が大いに花開きました。

廃藩置県後、福岡市は人口5万人からスタートします。福岡城から東へのび、那珂川へつながる堀を埋め立て開催された明治43（1910）年の第13回九州沖縄八県連合共進会をきっかけに都市機能が向上し、現在の天神市街地が誕生します。天神から中洲界限は街路が舗装され洋風建築が建ち並ぶモダン都市となり、人々は日常の生活から離れ、百貨店やカフェで西洋文化を楽しみました。



福岡城 南丸多聞櫓【中央区城内】



旧福岡県公会堂貴賓館【中央区西中洲】

【関連する文化財】

もの	金印 博多遺跡群出土品 黒田家大名道具 旧稀集 きゅうきしゅう 筑前名所図会 ちくぜんめいしよずえ
ばしょ	比恵・那珂遺跡群 博多遺跡群 聖福寺 承天寺 住吉神社 筥崎宮 福岡城跡 旧日本生命保険株式会社九州支店 旧福岡県公会堂貴賓館 旧福岡県庁 旧岩田屋本館 カフェブラジレイロ
いとなみ	金属器鑄造 ガラス工芸 博多祇園山笠行事 博多松ばやし 博多織 博多鋏 宗七焼 博多人形

繋がる

ヒト・モノ・情報をつなぐ海・陸・空の結節点

本市は古くより海路や陸路を通じて人々が往来し、物資や情報が集散する地域でした。大陸と日本をつなぐ外交・交易の拠点であった鴻臚館、江戸時代の流通ネットワークを担った街道と廻船など、各時代を通じて福岡・博多はヒトとモノ、情報をつなぐ結節点として機能しました。そして、博多駅・天神を拠点とする各種鉄道、高速道路、博多港湾、福岡空港といった海・陸・空路の交通網は、本市と国内外を有機的に結合させ、都市のさらなる発展を支えています。

海路でつながるヒト・モノ・情報

現在、大型クルーズ客船が往来し、世界各地の港とコンテナ航路のネットワークで結ばれる国際拠点港・博多。その原点は縄文時代にさかのぼり、弥生時代には稲作とともに様々な技術や文化が大陸や朝鮮半島から伝わりました。縄文時代の貝面や釣針等の漁撈具、弥生時代の土器等には、半島との強い文化的なつながりが表れています。稲作を基盤とした村々が統合されて成長した「奴国」や「伊都国」は中国と直接交渉を行い、博多湾岸は大陸や朝鮮半島との重要な交流拠点となっていました。

7世紀後半に設置された外交・交易の拠点施設である鴻臚館（筑紫館）には、9世紀以降、商人や僧侶、交易品など、たくさんのヒト・モノ・情報が東シナ海を通じて集まりました。この航路は鴻臚館廃絶後の11世紀後半、博多綱首と呼ばれた宋の商人たちによって維持され、国際貿易都市・博多の発展に繋がっていきます。

江戸時代には、幕府の鎖国政策で海外との海路が閉ざされたことにより、国際貿易都市・博多は終焉を迎えます。その一方、内航運搬が発達し、唐泊、宮浦、今津、浜崎、残島（能古島）の5つの浦で活動した筑前五ヶ浦廻船は、大型船による年貢米などの大坂や江戸への輸送や非常時の軍事的な荷船として活躍しました。

明治以降、国際貿易港として再出発を果たした博多港は、終戦後には、博多引揚援護局が設置され、約139万人の日本人引き揚げ者を迎え入れ、戦後の発展の礎となりました。



遣唐使船（模型）



唐泊大歳神社の廻船絵馬【西区宮浦】

陸路でつながるヒト・モノ・情報

海を通じて伝わった技術や文化は福岡・博多を起点として各地に伝播していきました。

今山産玄武岩の丈夫な石斧が北部九州一円に広がるなど、弥生時代にはすでに集落間を結ぶ陸・水路の交易ネットワークが形成されていたと考えられます。古代には、外国使節の往来の道として、鴻臚館（筑紫館）と大宰府を結ぶ官道が整備されました。鴻臚館は陸路と海路のネットワーク化によって大陸と日本との結節点となり、重要な役割を果たしました。

江戸時代には、江戸を発する五街道とその延長となる脇街道によって、全国各地を結ぶ陸路と宿場町が整備されました。城下町福岡を通る唐津街道は、藩主の参勤交代や長崎警備の移動の際にも機能しました。宿場町である箱崎や姪浜、今宿は、漁港や海路の拠点となる港を取り込んでおり、海産物などの物資も集まり、商業が発達しました。

近代になると鉄道交通が発達し、その拠点となった博多駅と天神を中心に市街化が急速に進みました。



明治 42（1909）年頃の博多駅（二代目）

空路でつながるヒト・モノ・情報

昭和期になり民間航空が発展すると、大陸に近い福岡に飛行場が整備され、本市は再び、アジアの玄関口として歩み出しました。昭和初期には、世界一周旅行中のリンドバーグ夫妻も来訪した名島水上飛行場や福岡第一飛行場（^{がんのす}雁ノ巣飛行場）が整備され、中国など海外との航路が結ばれました。戦後、飛行場はアメリカ軍に接收されますが、昭和 47（1972）年に板付基地が返還されて、福岡空港が開港します。福岡空港は市街地に非常に近いという高い利便性と人口の増加があいまって、九州の空の玄関口として急成長していきました。



昭和 11（1936）年に開港した福岡第一飛行場

【関連する文化財】

もの	貝面 大陸系土器 中国陶磁器 イスラム陶器・ガラス 礎石 唐泊大歳神社の廻船絵馬 九州鉄道発祥の地の碑 博多観光鳥瞰図
ばしょ	鴻臚館跡 今山遺跡 博多遺跡群 官道（野間遺跡・井相田遺跡） 姪浜 箱崎 福岡第一飛行場跡 名島水上飛行場跡 博多駅 天神 博多港 福岡空港
いとなみ	古代西海道 唐津街道 三瀬街道 筑前五ヶ浦廻船 姪の浜等の朝市

護る

国際交流都市のまもりと平和への祈り

本市は、人と文物が活発に行き交う国際交流都市である反面、侵攻・侵略などの脅威にさらされてきました。最新の技術や文化を吸収できる立地の代償として、国家間の緊張が高まると、一転してまもりの最前線となったのです。防人の設置、元軍の遠征と石築地の築造、戦国時代の戦乱、福岡大空襲などの数々の悲しい出来事を物語る文化財が市内各所に残されており、争いの恐ろしさと平和の尊さを伝えています。

古代国家のまもり

6世紀以降、東アジア全体で国家間の関係が緊迫してくると、その影響は博多湾岸にも表れます。新羅との緊張関係に端を発した筑紫君磐井つくしのきみいらいの乱の後に造営された「那津官家」は、兵站や政治的機能を担いました。唐と新羅の連合軍と戦った白村江の戦いの敗戦後は、玄界灘や瀬戸内海の沿岸の防衛体制の強化が図られます。その一環として博多湾沿岸に設置された「防人」は、海を越えて迫りくる脅威から国家をまもるため、東国をはじめ全国各地から最前線に召集された人々です。『万葉集』には、家族と離れ厳しい生活を余儀なくされた防人たちの悲哀が歌われています。



那津官家推定地（比恵遺跡）



万葉歌碑【西区能古島・也良の崎】

元軍の襲来と石築地

鎌倉時代、国際貿易都市として栄えていた博多に、元による軍事的遠征が伝えられました。博多湾岸一帯は間もなく戦場となり、町は甚大な被害を受けました。そのため、幕府の命を受けた九州各国の御家人らの手によって、博多湾岸に20 kmを超える防御施設「石築地」が築造されました。「元寇防塁」の名称で親しまれ、市内10か所に残される石築地は、この地が戦いの最前線であったことを如実に伝えています。さらに近代には「元寇の地」福岡をアピールするために、亀山上皇像かめやまじょうこうや日蓮上人像にちれんしょうにんが建設されました。



元寇防塁【西区今津】

博多の荒廃と復興

14世紀半ば以降、国際貿易都市・博多の支配を巡って争いが繰り広げられました。戦国時代後半には、島津、龍造寺、毛利、筑紫氏等の近隣勢力が博多をめぐって争い、博多は焼け野原になりましたが、豊臣秀吉の九州平定後、博多は太閤町割によって再整備され復興を遂げます。小早川隆景が築いた名島城は、文禄・慶長の役で朝鮮出兵の兵站基地として機能することになりました。

関ヶ原の戦い後に筑前国に入った黒田長政は、名島城に代えて福岡城を築きました。城の角々には周囲を監視する櫓が築かれ、北西隅に配置された潮見櫓は海を監視する役割がありました。寛永16(1639)年、幕府はポルトガル船の長崎への入港を禁じますが、報復に備え、寛永18(1641)年に福岡藩、翌年には佐賀藩にも、長崎の警備を命じます。福岡藩、佐賀藩の2藩は、幕末に至るまで、藩士を派遣して長崎港の警備を担いました。長崎警備は、西洋の技術や学問にいち早く触れる機会を福岡藩にもたらししました。



正保四年長崎警備図

戦争と平和への祈り

幕末、列強の帝国主義が日本に押し寄せます。福岡藩も長崎警備の体制強化を迫られ、浦賀への2度目のペリー来航を契機に、博多湾沿いの能古島、志賀島、須崎などに台場を築き、まもりを固めました。明治維新の後、福岡城内は陸軍省の管轄となり、筑前竹槍一揆を契機として歩兵連隊が配備されました。

昭和になると、戦争の影響が人々の生活にも及びました。昭和20(1945)年6月19日には福岡大空襲によって市内の約3分の1の家屋が罹災をするなど、大きな被害を受けました。現在、毎年6月19日には慰霊祭がとりおこなわれ、平和への祈りが後世に引き継がれています。



戦争復興記念群像
【中央区天神】

【関連する文化財】

もの	万葉歌碑 博多遺跡剥ぎ取り土層 長崎港図 正保四年長崎警備図 長崎港警備図 嘉永六年ロシア軍艦図（パルラーダ号） 銅造亀山上皇立像 銅造日蓮上人立像 博多港引揚記念碑 戦災記念碑 戦争復興記念群像
ばしょ	比恵遺跡群 能古島 鴻臚館跡 博多遺跡群 元寇防塁 筥崎宮 房州堀 石堂川 名島城跡 福岡城跡 志賀島 須崎公園 博多港 冷泉公園
いとなみ	戦災引揚死没者追悼式

支え合う

都市と村々の暮らしと信仰

本市の歴史的な生活空間は、河口部に発達した都市とそれを取りまく農村・漁村、その背後の山村から成り、この空間では様々な生業を持つ人々の数多くの生活と信仰が積み重ねられてきました。仏教は都市に定着して中世には博多禅が開花する一方で、周縁の山地や沿岸部にもまた寺院が営まれました。平野の村々では農耕に伴う祭祀が行われ、人々の願いや祈りは様々な民俗として地域に定着しました。都市と周縁の村々は互いに支え合いながら、一つの文化圏を形成してきたといえます。

都市の生活を支えた文化

中世に繁栄した博多や今津・姪浜などの港湾都市では禅宗が隆盛し、臨済宗寺院を中心に都市の生活文化が育まれました。黒田家家臣の立花実山^{たちばなじつざん}が発見し、書き写した『南方録』^{なんぽうろく}は利休の茶の神髄を伝える書として、博多独自の茶道流派「南坊流」を生みしました。福岡藩の御用窯として発展した高取焼^{たかとりやき}は数多くの名物茶器を生み出し、御用窯としての役目を終えた後も、都市の生活を支える器を焼き続けてきました。



高取焼窯元【早良区高取】

仏教文化と信仰

都市の禅宗寺院に対して、福岡平野の周縁部にそびえる山々には禅密兼修の山岳寺院が開かれました。なかでも、脊振山東門寺^{とうもんじ}や西油山天福寺^{てんぶくじ}等は多くの坊を抱えた大規模な寺院で、現在でも山腹や山麓にその遺構を見出すことができます。また、北崎の小田観音堂^{こたのかんのんどう}と志賀島莊厳寺^{しょうごんじ}にそれぞれ平安時代に制作された一木造りの観音像が遺されていることは、航海安全を観音に願う地域的な信仰が博多湾岸で行われていたことを想起させます。



小田観音堂【西区小田】

農村の暮らしと文化

弥生時代に伝来した稲作は地域の基幹産業として定着し、福岡平野や早良平野には多くの農村が成立しました。特に早良平野の五ヵ村（現在の早良区四箇^{しか}周辺）や脊振山麓

の脇山院（現在の早良区脇山周辺）は、中世の惣村^{そうそん}として住民の合議に基づいた自律的な地域運営が行われました。

農業を営む人々の経験によって蓄積された知恵は、農学の形で結実します。江戸時代前期に『農業全書』を著した宮崎安貞や明治時代に「筑前農法」を掲げて全国に犁耕^{りこう}の技術を伝導した林遠里は、市域を代表する農学者です。近代以降の都市化の進展に伴い、市内で農業を営む人の数も減りましたが、周縁部の農村には飯盛神社のかゆ占^{いもり うら}や金隈の鳶^{かねのくま とび}の水など昔ながらの農村の民俗習慣が残されています。



飯盛神社のかゆ占【西区飯盛】

海村・山村の暮らしと文化

博多湾沿岸や志賀島、さらに能古島、玄界島、小呂島といった島しょ部には、漁業や製塩業などの生業を営む海村が多く成立しました。『万葉集』にみえる志賀島の白水郎^{あま}の歌からは、海村に暮らす古代の人々の姿がうかがい知れます。江戸時代には廻船の拠点として繁栄し、北崎に残る船額や廻船絵馬、唐泊^{ごまんざい}の御万歳等の芸能に近世の海村の文化的隆盛が偲ばれます。また、来たる年の漁場の優先権をかけて、塩鯛をさばく早さを競う奈多のはやま行事も、海村の生活に直結した珍しい民俗行事です。

また、脊振山地の山懐に抱かれた板屋^{いたや}や椎原^{しいば}、曲^{まがり} 渚^{ぶち}等の山村では、農業以外にも林業に重きをおく山の生活が営まれました。飯場や脇山には人々が村の安寧と豊穰を願って奉納した神楽^{かぐら}の道具が伝わっています。



はやま行事【東区奈多】



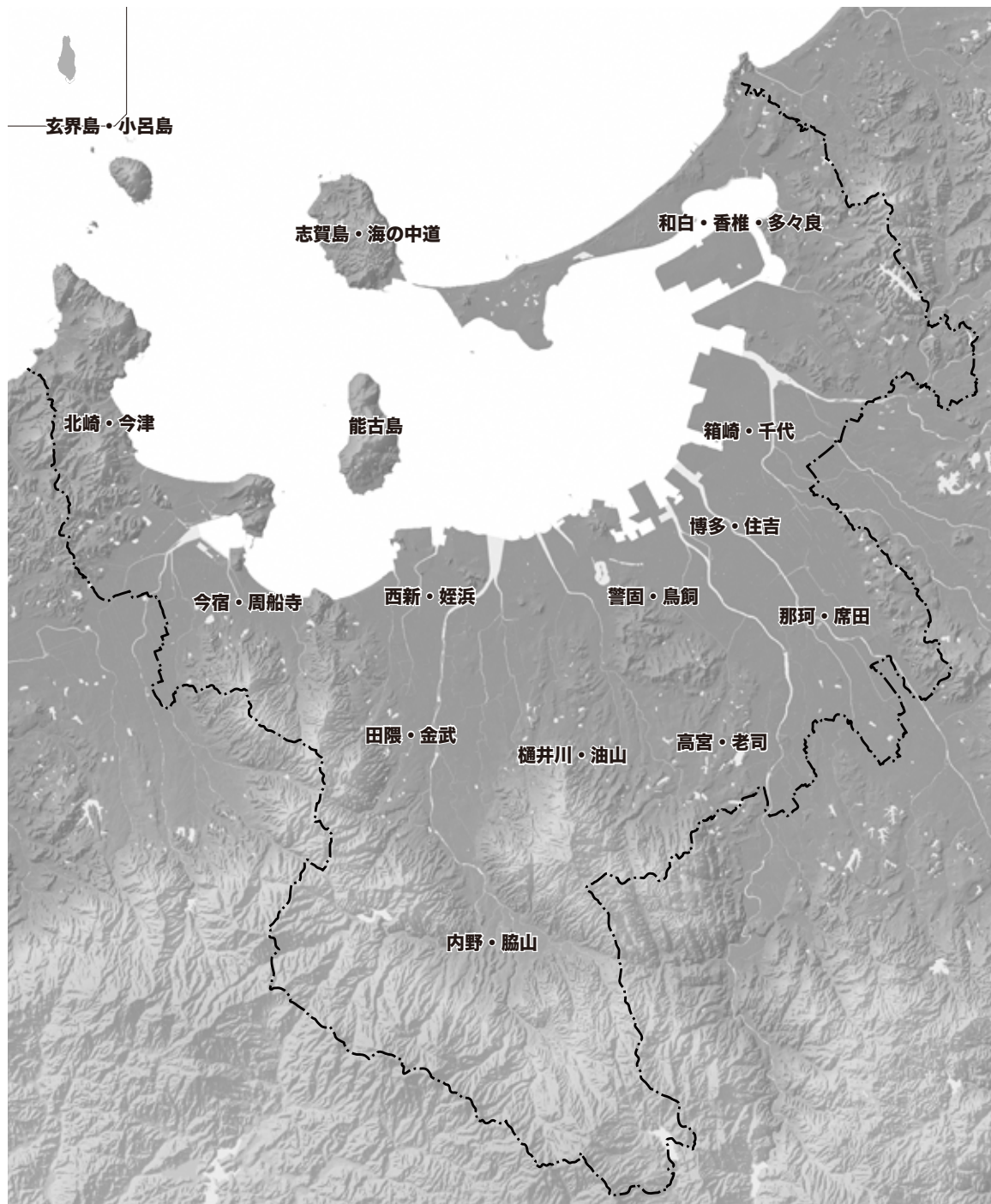
飯場神楽【早良区飯場】

【関連する文化財】

もの	誓願寺孟蘭盆縁起 ^{せんこうしやくはちまんよんせんとう} 錢弘俣八万四千塔 ^{せんじゆかんのんぼさつりゆうとう} 千手観音菩薩立像（小田観音） 聖観音菩薩立像 ^{しょうかんのんぼさつりゆうどう} （莊厳寺）明法寺 ^{みょうほうじ} 櫛文書 ^{しきもんじょ} 鳥飼文書 ^{とりかいもんじょ} 南方録 農業全書
ばしょ	莊厳寺 志賀海神社 聖福寺 承天寺 崇福寺 ^{そうふくじ} 圓覚寺 ^{えんがくじ} 興徳寺 ^{こうとくじ} 顕孝寺 ^{けんこうじ} 東門寺跡 名島城跡 福岡城跡 釣溝 ^{ぼんたくいせき} 番托井堰 ^{ばんたくいせき} 勸農社 小田観音堂
いとなみ	高取焼 飯盛神社のかゆ占 金隈の鳶の水 はやま行事 飯場神楽

(2) メインストーリーを体感する歴史文化エリアの概要

メインストーリーに加えて、より多くの人々に市内に点在する文化財を見て、触れて、メインストーリーを体感してもらうことを目的に、歴史文化の視点から市内全域を15の歴史文化エリアに分け、その概要を紹介します。また、資料編では「歴史文化エリアカルテ」を収録し、エリアの歴史文化を物語る文化財を紹介します。



ストーリーを体感できるエリア

【歴史文化エリアの概要】

しかのしま うみ なかみち
志賀島・海の中道

博多湾の玄関口にある志賀島と、国内でも珍しい砂州・海の中道があるこのエリアは、金印「漢委奴国王」発見の地として知られ、古代の海人・阿曇氏が祖神とあおいだ海神をまつる志賀海神社、元寇の激戦を物語る蒙古塚などの文化財があります。また、『万葉集』にも詠われた漁撈や塩づくりの痕跡が海の中道遺跡で見つかるなど、海とともに生きた人々の文化や大陸との交流の歴史が残されています。



志賀島・海の中道

わじろ かしい たたら
和白・香椎・多々良

香椎宮拝殿

『万葉集』にも詠われた景勝地・香椎潟があったこのエリアは、仲哀天皇と神功皇后をまつる香椎宮が鎮座し、神功皇后の三韓征伐に関連する伝承が多く残されています。中世には足利尊氏が戦った多々良浜の戦いがありました。戦国時代には立花城を舞台とした有力武将の覇権争いにより、戦火にみまわれましたが、筑前国を与えられた小早川氏が名島城を築城、関ヶ原の戦い後には筑前国に入った黒田氏によって香椎宮が再建されました。戦前には、名島に水上飛行場、雁の巣に飛行場が置かれ、日本の空路を支えました。

はこぎき ちよ
箱崎・千代

923年に創建された宮崎宮が鎮座するこのエリアは、門前町として、また博多に次ぐ貿易の拠点としてにぎわってきました。江戸時代には唐津街道の宿場町としてにぎわい、参勤交代の中継地として御茶屋が設置されました。街道沿いには、商家が建ち並び、千代町には福岡藩主・黒田家の菩提寺である崇福寺も創建されました。近代には九州帝国大学が誘致され、福岡市の近代化の礎となりました。



宮崎宮神幸行事

はかた すみよし
博多・住吉

博多祇園山笠行事

古代から交易の拠点として発展してきたこのエリアは、中世の国際貿易都市・博多の名残や太閤秀吉の町割、近世の町家、近代以降の都市の発展を重層的に感じることができます。住吉神社や櫛田神社といった由緒ある神社や、聖福寺や承天寺に代表される寺町が景観を形成し、博多祇園山笠行事や博多松ばやしなど本市を代表する祭礼が町ににぎわいと活気を与えています。

な か むしろ だ
那珂・席田

博多から大宰府に向かう道筋にあり、弥生時代以来、低地を利用した水田が広がっていたこのエリアは、古代の条里制の名残を残す水田区画が昭和初期頃まで残されていました。弥生時代の古い時期の農村が確認された板付遺跡や雀居遺跡、弥生時代の共同墓地である金隈遺跡などを通じて、弥生文化に触れることができます。



板付遺跡

け ご とりかい
警固・鳥飼

舞鶴公園

古代には鴻臚館、江戸時代には福岡城が存在したこのエリアは、海・陸の交通の要衝として発展しました。菅原道真ゆかりの水鏡天満宮に由来する「天神」の街は、現在、九州一の繁華街となっていますが、舞鶴・大濠公園に残された鴻臚館・福岡城の痕跡、街中にたたずむ近代建築、古い町割などから、往時のにぎわいに想いを馳せることができます。

たかみや ろうじ
高宮・老司

鴻臚館から大宰府へ向かう官道の推定ルートがあるこのエリアは、古代から近代に至るまでの多彩な文化財が存在する地域です。初期横穴式石室に豊富な副葬品が納められた老司古墳や、大宰府観世音寺とも関係の深い三宅廃寺跡や老司瓦窯跡、近代に炭鉱で財を成した貝島家の旧邸宅などを通じて、本市の悠久の歴史を感じることができます。



那珂川

ひ い がわ あぶらやま
樋井川・油山

油山市民の森

大規模な寺域を誇った東油山泉福寺（現在の正覚寺）がある油山の麓に広がるこのエリアは、樋井川兩岸の丘陵を中心に集落が営まれ続けてきました。山岳仏教が盛行し現在は市民の憩いの森として親しまれる油山、福岡藩主の別邸として作られた友泉亭庭園、田島神楽が奉納される田島八幡神社など、豊かな自然と歴史に触れることができます。

にしじん めいのはま
西新・姪浜

福岡平野と糸島平野をつなぐ海岸沿いに位置するこのエリアは、室見川沿いの微高地や、海岸の砂丘上を中心に、古い時代から人々の活発な活動が確認できます。弥生・古墳時代の交易拠点であった西新町遺跡や、古代早良郡の中心であった有田遺跡、元寇の記憶を今に伝える麓原山や元寇防塁、唐津街道の宿場町として栄えた港町・姪浜など、博多湾の港湾機能を支えてきた歴史を今に伝えています。



旧唐津街道姪浜宿

たぐま かなたけ
田隈・金武

吉武高木遺跡から飯盛山を望む

油山と叶岳に挟まれ、室見川の恵みに育まれた肥沃な土地を持つこのエリアは、河川兩岸の微高地や丘陵を中心に集落が展開してきました。弥生時代の拠点集落であった吉武高木遺跡や野方遺跡、丘陵斜面に営まれた大規模な古墳群、中世に大きな宗教的勢力を誇った西油山天福寺や飯盛神社、肥前と結ぶ三瀬街道沿いの町並みなど、連綿と続いてきた人々の営みを知ることができます。

うちの わきやま
内野・脇山

脊振山の豊かな自然に包まれたこのエリアは、中世の山岳信仰の隆盛とともに栄えた脊振山東門寺の寺領で、戦国時代には荒平城や池田城が築かれ、筑前と肥前の国境に位置する交通の要衝でした。山間部の水田開発には熊野比丘尼の伝承も残され、昭和天皇の即位時には大嘗祭に用いる新穀を穫るための主基斎田に選ばれるなど、山村と農村の様相を併せ持っています。



脇山から望む脊振山系

いまじゅく すせんじ
今宿・周船寺

今宿大塚古墳と高祖山

糸島半島の付け根に位置するこのエリアは、古代山城である怡土城が築かれた高祖山を背後に、尾根筋や海岸砂丘を中心に集落が営まれてきました。弥生時代に玄武岩を活かした石斧生産を行った今山遺跡や伊都国の交易拠点であった今宿五郎江遺跡、前方後円墳13基が築造された今宿古墳群、江戸時代に農地開発に貢献した農学者・宮崎安貞ゆかりの史跡など、自然を活かし共生してきた人々の暮らしを知ることができます。

きたざき いまづ
北崎・今津

糸島半島の東半、博多湾の西端に位置するこのエリアは、福岡・博多と大陸・朝鮮半島を結ぶ交通の要衝として重要視されてきました。「庚寅銘大刀」^{こういんめい た ち}が出土した元岡 G 6 号墳や、遣唐使の寄港地であった韓亭^{からどまり}（唐泊）、中世に港町として栄えた今津と寺院、海岸沿いに築造された元寇防塁など、海上交通に関わる史跡や習俗・信仰が良好に残されています。



毘沙門山から見た今津松原

のこのしま
能古島

能古島

博多湾に浮かぶ能古島は、江戸時代に廻船の根拠地の一つとして栄えました。一方で、古代の防人の設置、中世の外敵の侵入、江戸時代の台場の築造など、博多湾のまもりを大きく左右してきた島でもあります。また、古代は馬牧^{うままき}として、江戸時代には鹿狩りの場として利用されるなど、豊かな自然にも恵まれています。

げんかいしま おろのしま
玄界島・小呂島

志賀島と糸島半島の上に浮かぶ玄界島は、百合若伝説^{ゆりわか}を伝える小鷹神社^{こたか}があり、近世には藩の遠見番所^{とおみばんしよ}が置かれるなど、博多湾の玄関口に位置する離島です。一方、玄界灘に浮かぶ小呂島は、中世には海上交通の要所として、戦時中には陸海軍の要塞として重要な役割を果たしました。現在はハカタウツシの山笠行事もとりおこなわれています。



小呂島の山笠行事

column : 09

ふくおか人物伝 ～福岡の名付け親 黒田孝高・長政～

黒田家の筑前入国

福岡市外の人にとって分かりにくいエリアの区分の一つに博多と福岡の違いがあります。市の名称は福岡だけど代表的なJRの駅名は博多、企業の名前は福岡が多く、工芸品や農産物では博多が多いという印象でしょうか。この分かりにくさの原因(?)を作ったのは慶長5(1600)年の関ヶ原の戦い後に豊前国中津(大分県中津市)からやってきた初代福岡藩主・黒田長政(1568~1623)とその父孝高(官兵衛・如水1546~1604)と言えるかも知れません。

当初、前領主の小早川秀秋(1582~1602)の居城であった名島城(東区)に入った長政たちでしたが、城下が狭かったため、長く領国を統治する上でふさわしい城地を探すことになりました。江戸時代中期に成立した『黒田家譜』によれば、初めは住吉(博多区)、箱崎(東区)、荒津山(中央区)を候補地としましたが、いずれも一長一短あり、最終的には那珂郡警固村(中央区)の近くの福岡という、博多の西側に隣接する場所に決まり、四方に堀をめぐるし要害を固くした、とあります。

福岡という地名の由来

こうして完成した城は「福岡城」と名付けられますが、その命名の由来には諸説あります。よく知られているのは、黒田家の先祖が備前国邑久郡福岡(岡山県瀬戸内市)の出身で、長政が先祖を忘れないために付けたという説。これは福岡藩主・貝原益軒(1630~1714)が『筑前

国続風土記』で主張している話です。一方、益軒とも交流のあった藩士・安見有定(?~1725)は『筑陽記』の中で、「城床を岡山と云、福岡・岡山両名を合略して」福岡と号したという地名合体説の他、先祖故地説、瑞夢説など複数の説を挙げています。なお、福岡という地名が登場する最も古い文献は、黒田孝高が慶長7(1602)年正月16日に太宰府天満宮に奉納した「黒田如水夢想連歌」の中にある「松むめや 末なかかれと みとりたつ 山よりつく さとはふく岡」という歌です。安見有定が紹介する瑞夢説との関係がうかがえます。

福岡と博多の関係

国際貿易都市として繁栄した博多と、那珂川を挟んで西隣に完成した新たな城下町・福岡は、福岡藩の中心都市として一体となって発展していきます。その人口は、元禄3(1690)年の『筑前国続風土記』の統計では、福岡が町数23で15,009人、博多が町数113で19,468人を数えました(※武士は除く)。ただ、藩は税負担や格式面で博多よりも福岡を優遇する政策を取ることが多く、また、博多の祭礼・祇園山笠の飾りを藩が規制することなどもあり、城下の住民が藩主に抱く感情は一樣ではなかったようです。

それにしても、300年後に市名や駅名で議論が起こるとは、福岡を命名した孝高・長政親子も考えもしなかったでしょうね。



正保福博惣図(福岡市博物館蔵)



福岡・博多の境目、杵形門(福岡市博物館蔵)

ふくおか人物伝 ～仙厓義梵～

仙厓義梵（1750～1837）は、江戸時代後期に活躍した臨済宗の僧侶です。白隠、良寛とともに近世禅林の三傑と謳われ、江戸時代を代表する禅僧の一人として知られます。難解で深遠な禅の教えを、笑いとユーモアにあふれる軽妙洒脱な禅画と賛文で表現し、民衆に広めました。その作品は今もなお多くの人々の心を捉えて離しません。

美濃国（現 岐阜県）の農家に生まれ、11歳で地元の臨済宗寺院・清泰寺で得度し、義梵の僧号を得ました。その後、武蔵国（現 神奈川県）の東輝庵・月船禅慧のもとで修行を重ね、39歳の時に博多に下ります。そして寛政元（1789）年、聖福寺の第123世住持となり、疲弊していた同寺の復興に尽力。62歳の時に住持の座を退いて幻住庵の虚白院に隠棲しますが、亡くなる前年の87歳になって再び聖福寺の住持（第125世）に任ぜられました。

仙厓が書画の才を開花させたのは50歳代からで、あくまで自己流に徹し、技巧にとらわれない即興的な筆使いは歳を重ねるほどに熟達し、比類のないスタイルを築き上げてゆきました。

虚白院時代の仙厓は、人々の求めに応じて気軽に墨筆をふるっていましたが、やがて高まる人気に比例して増え続ける依頼の多さに観念し、絶筆を決意します。それは絶筆宣言を石碑に刻むほどの強い覚悟であったはずなのですが、やはり揮毫を乞う人たちに背を向けることはできなかったようで、ついぞ最期まで筆を休めることはありませんでした。

ことほどさように人気で多作ゆえ、現存する仙厓作品は、聖福寺・幻住庵といった縁深い寺院の他にも多くの収集家によって伝えられてきました。出光美術館のコレクションは有名ですが、福岡市美術館にも地元のコレクターからの寄贈・寄託による質の高い仙厓作品が約200点保管され、定期的に展示公開されています。



猫に紙袋図「見んか見んか」（福岡市美術館蔵）